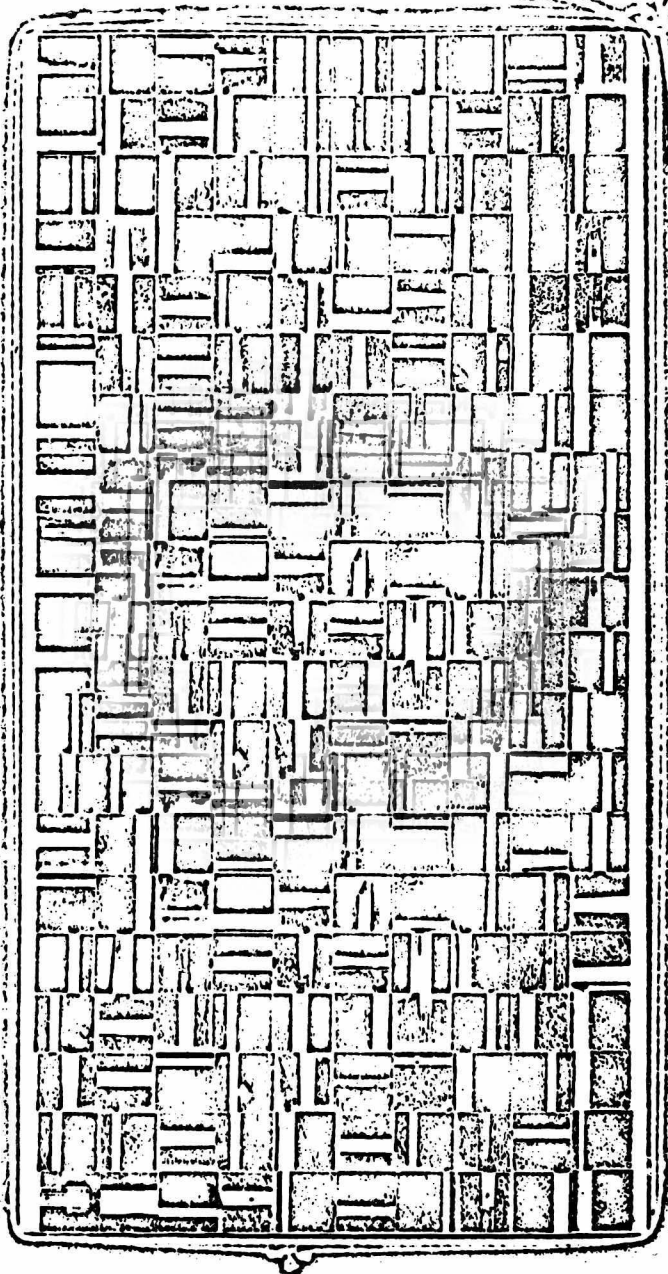


7

鮎川信夫著作集



鮎川信夫著作集 第七卷

戰中作品

発行一九七四年十一月一日 著者鮎川信夫 装幀粟津潔 発行者小田久郎 発行所株式会社思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三一五 電話東京二六七―八一四一 振替東京八一二一 印刷八光印刷
製本 岩佐製本 製函岡本紙器 用紙王子製紙 表紙日本クロス ©1974, Nobuo Ayukawa

目次

詩 1937～1943

黄昏 8

凍眠 10

扉の中 12

蠟燭の中——夜に 14

遊園地区 15

花——「垂細垂」の一部 18

河——「垂細垂」の一部 20

頌——「垂細垂」の一部 22

樹 24

少年のスビイド 26

春の頌歌 28

ギリシヤの日傘 30

夏の Souvenir 32

楽器の世界 34

室内 36

田園の祭礼 38

のどかな樹のある沙漠

40

夢みる室内

43

夢の使用時間

45

名刺

46

唄

47

白い像

49

カタストロフ

50

睡眠

52

非望の自転

53

魅入られた街

57

椅子

60

雑音の形態

62

室内

66

黄昏の椅子

68

十二月の椅子

71

椅子

73

形相

75

雨をまつ椅子

77

雨の歌 79

形相 81

形相 83

陰翳 85

泉の変貌 87

形相 96

囲繞地 98

神 107

神 109

神々 111

雨に作られし家 113

橋上の人 115

評論 1939~1942

覚書——現代詩の性格的变化と方向 120

不安の貌 27

批評家の態度に関するノオト 137

近代詩人 144

文学の摂理 148

近代詩について 162

永田助太郎論 184

囲繞地 188

「鞭のうた」に就て——牧野虚太郎の靈にささぐ

196

スタンダル

第一章 伝記について 202

第二章 承前(補) 210

第三章 論理 214

「魅惑」の蔭にて 217

戦中手記

戦中手記 226

補述・菊の街 283

「戦中手記」後記 293

日記

I 1938~1939 308

Ⅱ 1941 359

Ⅲ 読書日記 1938～1939 373

解説

けむれる一個の霧——主に戦中の詩について——北村太郎 376

虚無の遺産——清水昶 392

*

編集ノート——三好豊一郎 405

掲載誌紙・製作年月日一覧 413

附 1937～1943

黄昏

青柄のシャベルで
雲の涯をほじくり
珊瑚を撒き散らし

駈けてゆく風である

ぶんぶんと翅虫は

青い靄を裂く

と……

高い梢の向うの響は

地球の悲鳴

その木霊でもあらうか

白い頸の猫は

星達のさざめきの蔭から

月の窓を窺ってゐる

影が凍りついてゆく
黒い花

淵に散る

凍眠

氷が音たててはぜる

—— ぽっかり

黒い穴があく

(落葉は降りしきる あゝ淋しい曲を聞いた)

眩暈がする

ふるえるセルロイドの掌

(夢であつたらうか)

魚のやうに眠る日

ぼうぼうと潮騒は杳く

(それは忘れられた日のロマン)

落日の朱が氷柱をながれ——

凍りついた眼を

啄みにくる

灰色の鳥をまっ
てゐる

扉の中

カレンダーに音楽が流れ
華の咲いてゐるテーブル
竜舌蘭を食べてゐる紳士は
今晚十二時に出帆します
海に向つて帽子をふつて
震へてゐる爪に霧がかかる

杳い寒帯から運ばれたミルクに溺れる頃
扉の外をマアチが風と共に過ぎる
盛んに蠟を焚く女のプロフィール
海の景色はこんな暗い青でせうか

油絵の裏に隠れてゆく黄ろい月
軍艦はシーツの皺に沈没する
窓を開けると雪が踊つてゐる

逃げてゆくのは白い犬だ
雪に埋まる扉

蠟燭の中——夜に

ガラスの中の青い花

机の上は　すでに白い雪である

炎は昆虫のやうに翅をならす

白い蠟燭の中に住まつてゐた

意地悪な眉のながい神が

“ステッキを忘れて” 逃亡した

僕は新しい贅沢な船の設計について

素敵なプランを考へはじめた

時計が霜の花の上で鳴くと

太陽の跫音が近づいてくる